
[5] 北陸

田嶋明人

はじめに

課題として求められたことは、北陸での食に係わる土師器、陶磁器、木器、石製品等を取りあげ、中世の食器様式を総合的に概観することであったが、筆者の怠慢によりなし得なかった。課題からはあまりに不十分な内容となったが、ここでは中世土師器に限って報告する。中世土師器の報告では、前半部分を編年的整理にあてた。編年的整理では、加賀の状況をやや詳しく触れ、能登、越中、越後（佐渡）に関しては、加賀との相違点や、特徴を指摘するにとどめた。後半部分では、出土状況や用途に関して若干の検討を試みた。

①……………加賀(石川南西部)

中世土師器の編年には、古代から中世前半期を扱った筆者の編年〔田嶋1986・1988〕、中世全般を総合的に扱った藤田邦雄の編年〔藤田1989・1992〕、14世紀から15世紀代を細分した望月精司の編年〔望月1993〕などの研究がある。近世では増山 仁の研究〔増山1992〕などがある。以下の報告は、藤田の論文を参照いただければこと足りるといえるが、若干の私見を交えつつ、藤田編年を軸に概観する。

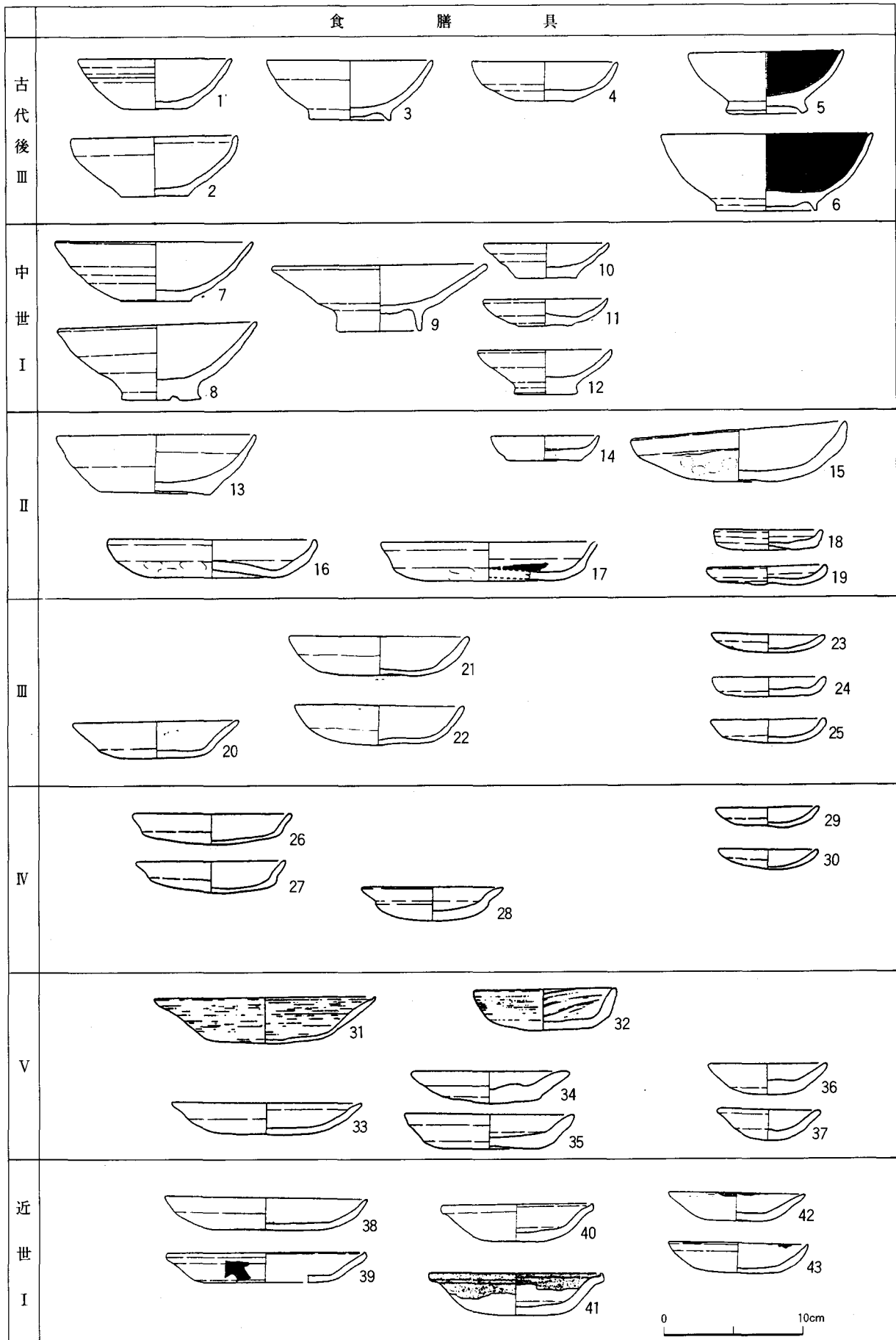
[古代後Ⅲ期]

田嶋編年のⅦ期に該当〔田嶋1988〕する。石川郡鶴来町安養寺遺跡柴木BL地区(Ⅶ₁期)、安養寺遺跡柴木地区ピット71(Ⅶ₂期新)、松任市三浦遺跡土坑(Ⅶ₂期新)を標識とする。

三浦遺跡土坑資料は未報告資料であるが(前田清彦教示)、Ⅶ₂期新段階を細分する好資料となる。当資料に即して、この間の土師器の推移の大枠を小皿で示すならば、小皿が組成として充分に定着していない段階と(Ⅶ₁期)、定量的に定着をみる段階に大別でき(Ⅶ₂期)、Ⅶ₂期は小皿の法量に規格性がみられず、量も相対的に少ない段階(Ⅶ₂期古)、規格性をもち、定量的に定着する段階(Ⅶ₂期新-1)、小皿法量が11cm前後から9cm前後に小型化する段階(Ⅶ₂期新-2⁽¹⁾)と、細分できよう。図1の松任市中村井手遺跡資料はⅦ₂期新に該当しよう。

素材別では、古段階には若干の須恵器が伴うと推定されるが、土師器に淘汰される。施釉陶も急激に減少する。黒色処理は原則的に椀Bに限られるようになる。組成では、椀B2種、椀A、小皿と希に皿を加える。若干の法量差をもつとはいえ、単純化する。形態的にはいわゆる深椀タイプ、いわゆる足高高台の出現(顕在化)を特徴とする。この期の狭義の土製食器の変化は、素材・組成の淘汰・再編にある。中でも、土師器食器が大多数の脆弱な製品と、相対的に堅牢な一部の製品と

図1 加賀



1～6 中村井出遺跡, 7～12 北塚遺跡, 13～15 白江梯川遺跡 410井戸, 16～19 銭畑遺跡 SD 6, 20 中屋サワ遺跡 SK01, 21～25 辰口西部遺跡群 E 2 号土器だまり, 26・27, 29・30 末松遺跡 A 6 埋納ピット, 28 普正寺遺跡 中・下層面, 31・32 勅使館 D 2-2 土坑, 33～37 銭畑遺跡 SD 6, 38～43 江戸町跡推定地

に明瞭に形式分化する画期と考えている。用途に応じた作り分けがはじまる段階ととらえたい。それは、一過的使用と大量投棄を大きな特徴とする、中世土師器に直接つながる形式の創出であり、古代土師器の解体と評価しておきたい。

煮炊具には鍋、長甕がみられる。量を著しく減少し、当期の中で消滅する。その他、希に三足をもった甕がみられる。長甕の衰退や、三足甕の存在は、炉構造の変化を予想させる。煮炊具素材の鉄器への置換は、当期での土製煮炊具の衰退・消滅に先行し、9世紀後半段階以降急速に進行したと予測している。次の中世Ⅰ期では、土製煮炊具がまったくみられなくなる。

[中世Ⅰ期]

田嶋編年でのⅦ期・Ⅷ期〔田嶋1986〕、藤田編年Ⅰ期に該当する。小松市漆町遺跡3号井戸、金沢市北塚遺跡資料（以上田嶋Ⅶ期）、加賀市田尻シンペンダン遺跡01大溝、加賀市三木だいまん遺跡6溝、漆町遺跡100号土坑資料（以上田嶋Ⅶ期、藤田Ⅰ－Ⅱ期、Ⅰ－Ⅲ期）などを標識とする。

前半期は田嶋Ⅶ期を該当させる。資料が少なく、様相は必ずしも明らかでない。その点で、後半期との様式区分も今後の課題としてのこしている。7～12の北塚遺跡資料は前半期に帰属させ理解しているが、組成・形態で後半期と大きな違いはみられない。検討課題としておきたい。組成は椀B、椀A、小皿の他、古代後Ⅲ期ではほとんどみられなかった皿B（皿A?）が加わるようである。組成比では小皿比率が増加するようである。形態は、いわゆる柱状高台の盛行、小皿は従前の椀形態のもの他、磁器写しかと推定される形態のものほか加わり多様化する。黒色処理は原則的に椀Bに限られる。なお、筆者は黒色処理の消長に関し、古代後Ⅲ期での衰退を強調し、当期に瓦器等の影響をうけて再興するとした〔田嶋1986〕。その後の資料では、古代後Ⅲ期での黒色処理の存続がほぼ確実視されるに至った。黒色処理が当期に相対的に盛行したとする理解は妥当視できるが、古代後Ⅲ期での衰退の強調は訂正しておく。当期は土器量が極端に少なくなる。古代後Ⅲ期にみられた大量廃棄例は、加賀では確認できていない。そのことは、確認遺跡の減少によるとも考えられるが、土器の大量使用という在り方の相対的鎮静化段階と予測しておきたい。

後半期は田嶋Ⅷ期を該当させる。田尻シンペンダン遺跡01大溝→三木だいまん遺跡6溝→漆町遺跡100号土坑の推移を想定しているが、先で触れたように、前半期の様相が不明な点で、様式の大枠区分に保留部分をのこす。また、最終段階とした漆町遺跡100号土坑資料は、いわゆるT系中世土師器を伴っていなかったことから当該様式に含めたが、併行期にはT系中世土師器が定量的に波及している可能性を残しており、同時に、後述するようにR系土師器の組成より、次の中世Ⅱ期に含めるべき資料である可能性をもつ。組成は椀A・B、皿A・B、小皿よりなり、わずかではあるが定量の高い柱状高台に小皿を結合した、灯明専用器がみられる。皿A・Bは、前半期同様、椀との区別が曖昧である。量は少ない。黒色処理は原則的に椀Bに限られる。小皿は多様な形態差をもった大型品から、形態差を収束させ小型化していく。椀B（皿B）は遅くとも漆町遺跡100号土坑資料段階では組成から欠落し、それにともない黒色処理もみられなくなる。成形技法の主体はR系よりなるが、田尻シンペンダン遺跡01大溝では、少量のT系製品がみられる。T系製品は次の中世Ⅱ期に定量的に波及するが、当該期での波及状況は分明ではなく評価はできていない。

[中世Ⅱ期]

12世紀中頃から13世紀前半代をあてる。田嶋編年Ⅸ期・Ⅹ期、藤田編年Ⅱ期に該当する。小松市

白江梯川遺跡410号井戸，一括性に問題をのこすが，加賀市永町ガマノマガリ遺跡40号土坑（以上田嶋Ⅸ期，藤田Ⅱ－Ⅰ₁期），小松市銭畑遺跡5号溝（田嶋X₁期，藤田Ⅱ－Ⅰ₂期），小松市漆町7号井戸（田嶋X₁期，藤田Ⅱ－Ⅱ期）などを標識とする。資料は多い。

中世Ⅱ期はR系からなる在来土師器組成に，T系土師器が定量的に波及してくる段階（田嶋Ⅸ期）と，T系土師器が主体となり，定型化したT系土師器（16・17）が定着する段階（田嶋X₁期）とに大別できる。煮炊具ではT系の鍋が波及し，定量みられるようになる⁽²⁾。鍋は中世Ⅲ期までみられる。

前半期は田嶋編年Ⅸ期，藤田編年Ⅱ－Ⅰ₁期をあてる。R系土師器に定量のT系土師器が加わる段階。T系土師器は口縁部に二段のナデを施したタイプないしはその変形タイプ(15)からなり，16のタイプが加わらない段階とみられる。ただ，T系土師器は形態的には多様性をもち，R系土師器もT系土師器を模したものがみられるなど，斉一性に乏しい。当該期を過渡的段階とみるか，個々の様式として把握するのか，統一的理解は得られていない。

後半期は田嶋編年X₁期，藤田編年Ⅱ－Ⅰ₂期からⅡ－Ⅱ期に該当する。T系土師器が加賀での土師器製作技法として確立する段階で，形態的に斉一化した定型的な16・17のタイプが定着する。皿，小皿はT系土師器，椀Aと灯明専用器はR系土師器からなり，形式と技法に明瞭な使い分けがみられる。その他，若干のR系小皿がのこるが，当期の早い段階に消滅すると推定される。

[中世Ⅲ期]

13世紀後半代から14世紀前半代をあてる。藤田編年のⅢ期にあたり，前半部分は田嶋編年X₂期にあたる。小松市牧口中世墳墓，能美郡辰口町辰口西部遺跡群E2号土器だまり（藤田Ⅲ－Ⅰ期），金沢市中屋サワ遺跡SK01（藤田Ⅲ－Ⅱ期）等を標識とする。Ⅲ期は16・17のタイプが定量的にみられる段階と，底部が丸く内湾気味の口縁部をもつタイプ(22)と，体部中程でくびれて外反するタイプ(20)が主体となる段階に大別でき，辰口西部遺跡群E2号土器だまり資料がその過渡的段階にあたる。そして，少なくとも前半段階は中世Ⅱ期のあり方を踏襲する。

土師器はT系土師器よりなる。R系土師器は，前半段階には残存する可能性を残しているが確認例はない。組成は大皿，小皿よりなり，大皿は縮小傾向をもって推移する。

[中世Ⅳ期]

14世紀後半代から15世紀中頃をあてる。藤田編年でのⅣ期にあたる。石川郡野々市町末松A6埋納ピット（藤田Ⅳ－Ⅰ期），金沢市普正寺中・上層面（藤田Ⅳ－Ⅱ期）等がみられる。藤田はⅣ期の成立に関して，末松A6埋納ピット段階での，口径6cm代，9cm～10cm代の皿の出現を明らかにし，中世Ⅱ期以来の法量規格が解体する大画期とする〔藤田1992〕。同時に土師器皿機能の転換を指摘する。このことは後述する。

中世Ⅳ期は，少なくとも土師器では，中世を二分する画期の様式としたい。土師器皿は20・22の系譜のもので構成され，20の系譜のものが徐々に減少，22の系譜のものは丸底傾向を強め，藤田Ⅳ－Ⅱ期で急激に器壁の厚いもの(28)へと変化する。法量の変化と，形態の変化という二つの変革を内包した段階ととらえられる。

[中世Ⅴ期]

15世紀後半代から16世紀末をあてる。藤田編年のⅤ期にあたる。加賀市勅使館D2－2土坑

(V-I₁期), 小松市銭畑遺跡 SD 6 (V-I₂期), 小松市高堂遺跡 SD 4 (V-I₂期) 等を標識とするが, 良好な一括資料は意外と少ない。いわゆる京都系土師器皿(31)が確実にみられるようになり, 36・37タイプを主体に構成される段階である。法量では大・中・小がみられるとされる。その中で, 32 (勅使館 D 2-2 土坑 V-I₁期) の小皿は, 当期では異質であるが, 類似の例は先行期にもみられ, 越中では定量的に確認できる。一つの系譜として分布状況を加味しつつ検討していきたい。

[近世 I 期]

金沢市兼六園内の江戸町跡推定地資料がある。

②……………能登(石川北東部)

中世土師器の編年には, 四柳嘉章の一連の研究がある〔四柳1987・1992〕。四柳は11世紀末から16世紀末までを4期, 11小期に分割する。I期は11世紀末から12世紀後半に置き, 12世紀中頃を境に2小期に細分, II期は12世紀末から13世紀後半, III期は13世紀末から15世紀中頃, IV期は15世紀後半から16世紀とする。四柳の大枠区分, 中でもI・II期の区分は説得力のある区分といえる。図2は四柳の編年によりつつ作成したものである。作成にあたっての若干の補足と, 加賀地域との相異点を指摘するにとどめる。

[古代後 III 期]

まとまった資料は少ない。保留部分を残すが, 羽咋市深江遺跡井戸資料(1~5)をとった。椀Aは小型化しているが定量の小皿がみられないことから, 古代後III期でも古段階の資料といえよう。

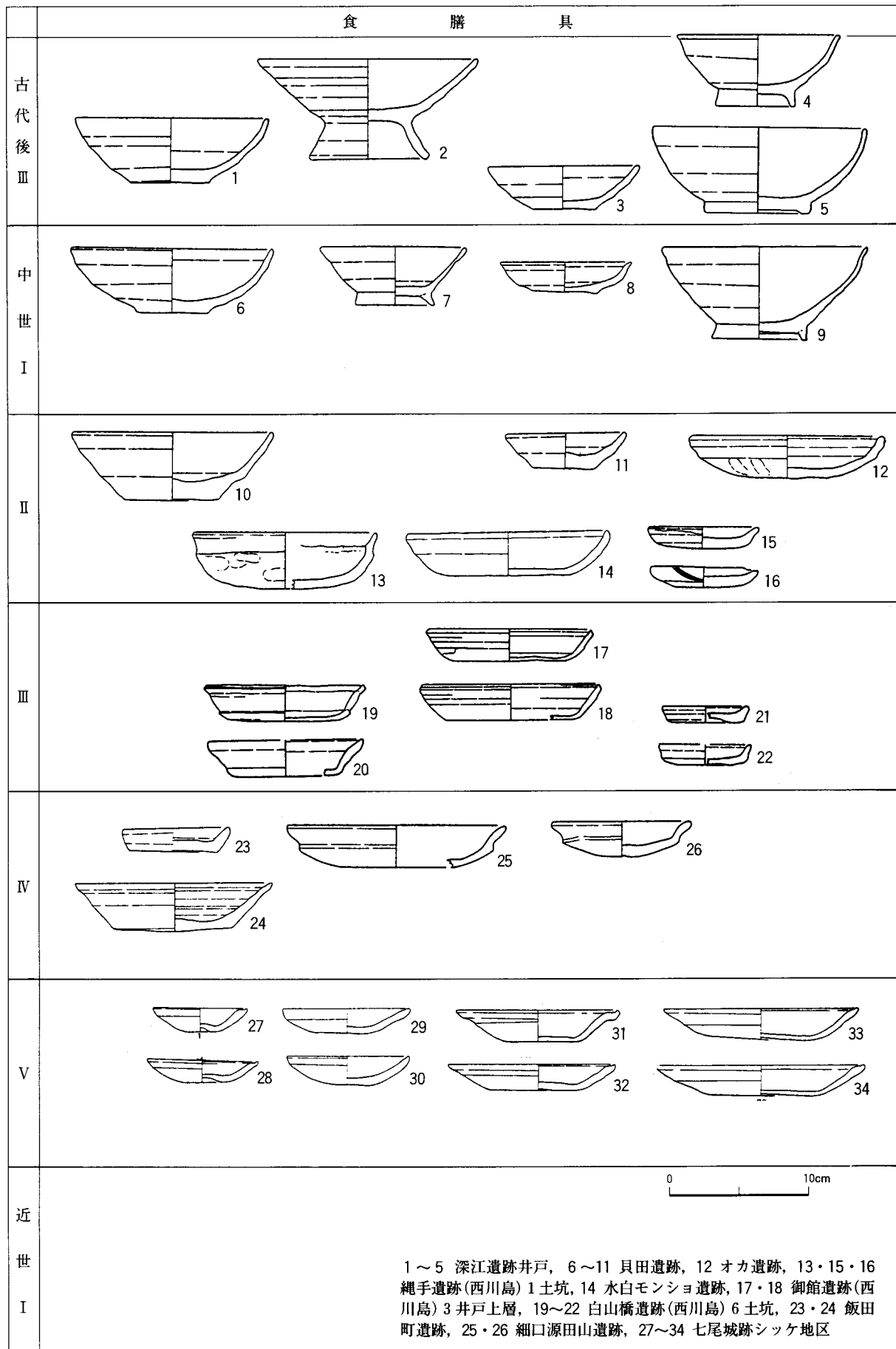
[中世 I 期]

6~9は鳳至郡富来町貝田遺跡包含層資料から抽出したものである。様相の提示に主眼をおいた。個々の個体の時期比定は今後の課題としておきたい。その他, 七尾市能登国分寺遺跡, 未報告であるが鹿島郡鹿島町武部ショウブタ遺跡, 羽咋郡志賀町北吉田ニシャグチ遺跡等の資料がある。能登国分寺遺跡では中世I期頃と推定される図3 10に類似した皿Bがみられる。皿Bは加賀でもみられるが形態で異なる。消長は十分に把握できていないが, 能登での古代後III期からの系譜では理解しがたい。越中に類例がみられることから, 東日本からの波及の西限の様相ととらえたい。

[中世 II 期]

T系土師器が定量的に波及し, 後半段階には在来のR系土師器が消滅するという大枠での動きは加賀と共通するが, T系土師器の定量的波及時期と, 後半段階でのT系土師器を構成する形式に違いがみられる。T系土師器の定量的波及時期は, 中世I期の後半段階に遡上する〔四柳1992〕。根拠の鹿島郡中島町オカ遺跡資料や, その後確認された貝田遺跡資料はともに包含層的資料であり, 厳密な供伴資料を伴うものではないが, 形態的特徴から12世紀前半代のもものと理解されている。四柳がI期を11世紀末から12世紀後半におく根拠の一つはここにあると思われる。いずれにせよ, 能登でのT系土師器の定量的波及が中世I期へ遡上するのは确实といえよう。このことは北陸での中世土師器編年に関わる問題である。中世II期後半段階では13と14のタイプがみられる。四柳が編年の素材とした北能登, 穴水地域では13のタイプが主体をしめ, 14のタイプは後出するようである。

図2 能登



それに対し中能登地域にあたる鹿島郡鹿島町水白モンシヨ遺跡資料では、破片的であるが14のタイプが主体をしめるようである。両タイプの分布状況は検討できていないが、かなりの偏りをもつようである。13のタイプは厳密な対比はできていないが能登以外の地域でもみられる。北能登固有形式としてではなく系統差と理解しておきたい。

[中世Ⅲ期]

中世Ⅲ期前半は、Ⅱ期後半の様相を継承する。四柳がⅡ期を12世紀末から13世紀後半に置くことも整合する。鳳至郡穴水町西川島遺跡ではこの頃、17、18のタイプが中心となる。R系土師器は、保留部分をのこすが衰退するようである。後半には体部でくびれる19、20のタイプがみられる。

[中世Ⅳ期]

北能登、珠洲地域でR系土師器がみられる(23・24)。23は糸切り痕をのこし、24は底部をヘラケズリしている。R系土師器の推移、分布範囲は明らかでないが、越後、越中と連動した動きととらえておきたい。

[中世Ⅴ期]

資料は多い。27～34は七尾市七尾城シッケ地区資料で、中世Ⅴ期では新段階に属す。いわゆる京都系土師器からなるが、当該遺跡は能登守護島山氏の城下町遺跡であり、一般化は今後の課題である。

③……………越中(富山)

中世土師器の編年には、宇野隆夫〔宇野1986〕、伊藤隆三〔伊藤1990〕、宮田進一〔宮田1992〕の研究などがある。研究の内、宮田論文は中世全般を扱ったもので、11世紀後半から16世紀末までを6期15小期に細分する。編年の枠組みは加賀での編年と共通しているといえるが、中世Ⅰ期を「前Ⅰ期」ととらえる点と、中世Ⅴ期をⅣ期とⅤ期の二期に区分している点で異なる。図3は主として宮田編年によりつつ作成したものである。能登同様、若干の補足と加賀地域との相異点を指摘するにとどめる。

[古代後Ⅲ期]

まとまった資料はほとんどみられない。1～4の小矢部五社遺跡B2E地区古代上層面の資料は、少なくとも中世Ⅰ期の遺物を混在した包含層資料である。様相の提示を主眼をおいた。古相のものを抽出したが、個々の個体の時期比定は今後の課題としておきたい。

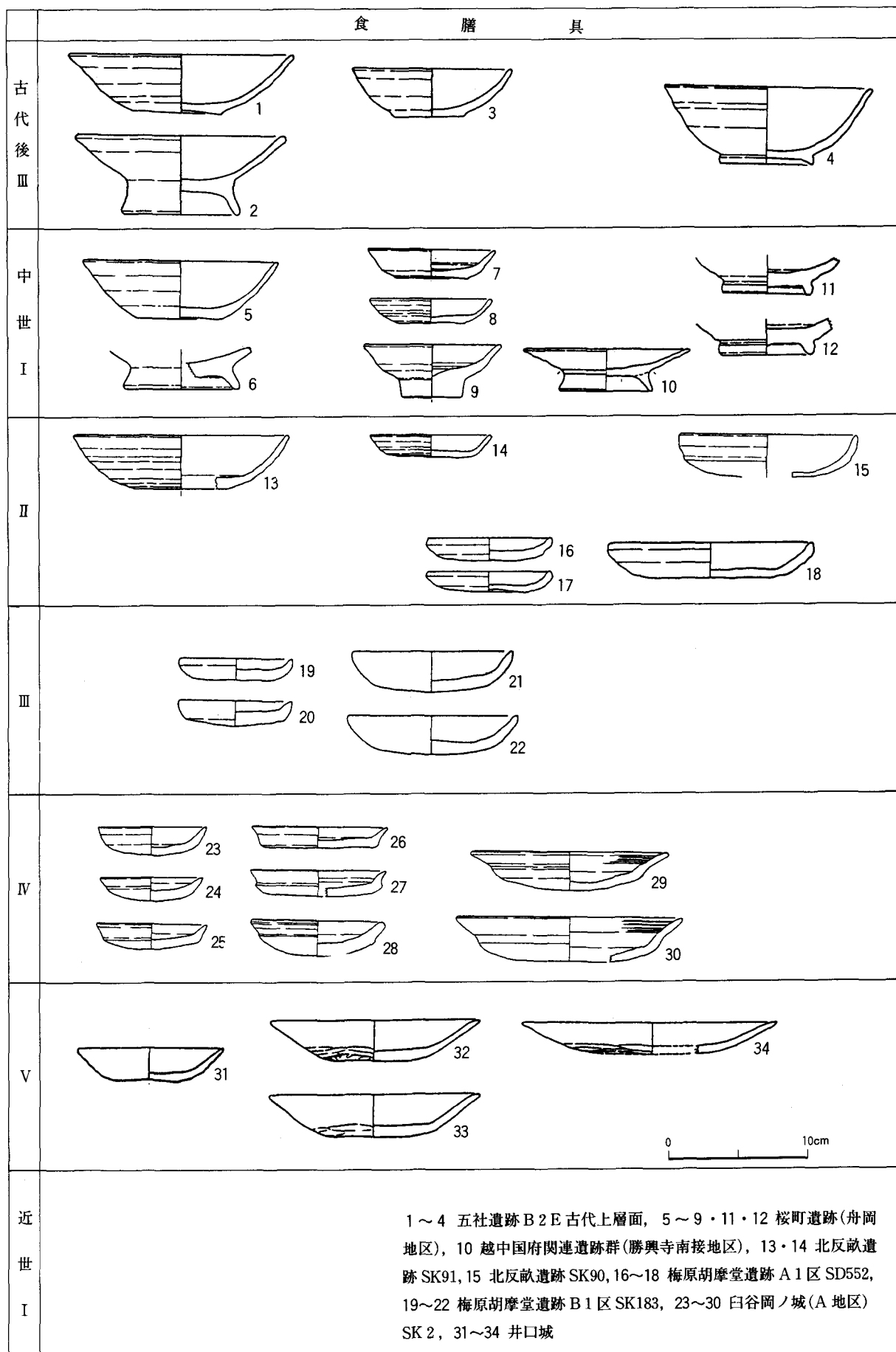
[中世Ⅰ期]

中世Ⅰ期からⅡ期にかけては伊藤が編年を提示している〔伊藤1990〕。5～9、11～12では小矢部市桜町遺跡(舟岡地区)資料を採用した。他は先での五社遺跡などがある。組成の大枠は加賀と共通するようみられるが、古代後Ⅲ期から中世Ⅰ期ないしは中世Ⅱ期前半期にかけて、皿B(10)が顕在する。加賀と異なる特徴といえる。

[中世Ⅱ期]

T系土師器が波及し、後半段階の13世紀前半代でR系土師器は消滅する〔宮田1992〕。15のタイプから18のタイプへのT系土師器の推移は加賀と共通する。能登と比較し18タイプが顕在するよ

图3 越中



0 10cm

うであるが、図示しなかったが、丸底でやや深みの一群もみられる（礪波市東保高池遺跡）。R系土師器では図示したタイプその他、7のタイプ、あるいは9の系譜を引くタイプもみられる。黒色処理は衰退するようである。

[中世Ⅲ期]

在地色が強くなる段階とされる〔宮田1992〕。資料は少なくないようで、ここでは良好な資料を抽出できなかった。19～22は13世紀後半代とされている一括資料である。個体数が少なく組成を把握するには至らないが、先行期との脈絡はあまり見いだせない。加賀に比較し在地化が先行するのか、やや後出の資料であるのか今後検討したい。

[中世Ⅳ期]

R系土師器が出現し、一部で中世Ⅴ期まで残る。北陸北東部での再興と連動した動きといえる。23～30はT系土師器で、丸底化し器肉は厚い。Ⅳ期後半段階での加賀の在り方と共通する。

[中世Ⅴ期]

東礪波郡井口村井口城、中新川郡上市町弓庄城、富山市白鳥城、婦負郡婦中町安田城など資料は多い。城館跡の調査量と連動しているといえよう。31～34は井口城SK15の資料で、中世Ⅴ期では古段階に属す。いわゆる京都系土師器（33～34）とR系土師器〔31〕がみられる。R系土師器は16世紀はじめ頃までみられる〔宮田1992〕。

④……………越後・佐渡（新潟）

中世土師器の編年には、坂井秀弥〔坂井1988〕、品田高志〔品田1991〕、鶴巻康志〔鶴巻1991・1992〕等の研究がある。諸氏の研究成果によりつつ図4を作成した。

[古代後Ⅲ期]

上越市一之口遺跡（東地区）に良好な資料がみられる（1～7）。当該資料は、加賀での小皿の推移を敷衍するならば、古段階の資料ととらえられよう。組成では皿がみられず、黒色処理が椀Bの他、椀Aにもみられる。

[中世Ⅰ期]

上記一之口遺跡での後出資料、後半段階まで遡る可能性をもつ堂城遺跡などがみられるが、良好な資料は抽出できなかった。

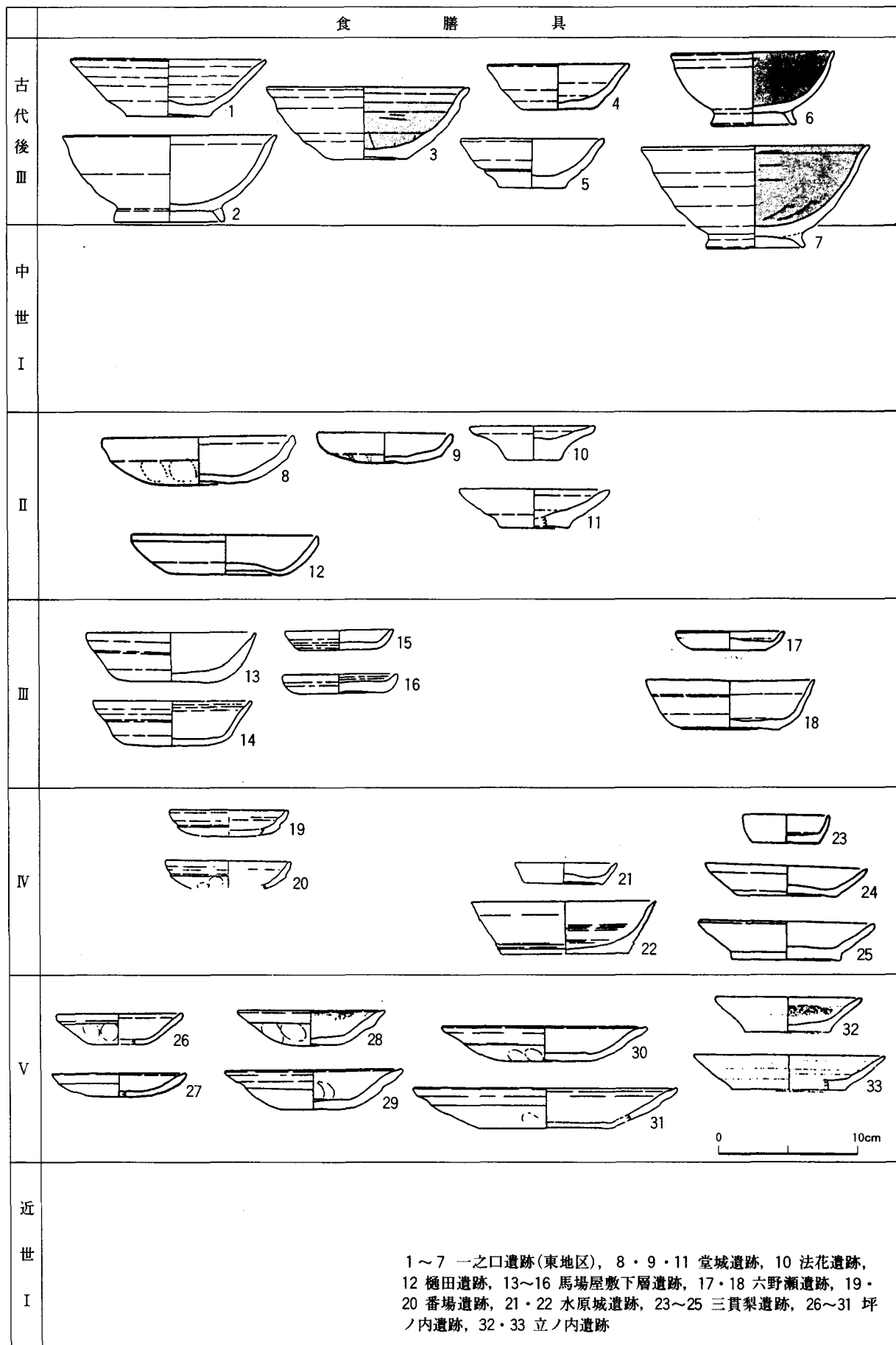
[中世Ⅱ期]

T系土師器が普及する（8・9・12）。8は古段階のものとして良からう。R系土師器は包含層資料等から抽出したもの（10・11）で、中世Ⅰ期の資料を含んでいる可能性がある。12のタイプは阿賀野川以北の地域には波及しない〔鶴巻1992〕。

[中世Ⅲ期]

顕著な地域色が現われる段階とされる。T系土師器は変容し「頸城型」、「刈羽・三島型」、「阿賀南型」〔品田1991〕を生み出す。13・14は、「阿賀南型」と呼ばれているもので、正応4年・5年・6年（1291～1293）の記年銘木簡を伴っている。R系土師器では漆器を模したと想定されているタイプがみられる（17・18）。中世Ⅱ期までの在来型のR系土師器の消長は明らかでない。一方、阿

图4 越後



賀野川流域から北部地域では、T系土師器の在地化したものと理解される〔品田1991〕C類土師器〔坂井1988〕が成立する〔鶴巻1992〕。

[中世Ⅳ期]

R系土師器が盛行する(21~25)。盛行期は中世Ⅳ期でも後半段階とされる。R系土師器の23~25は、先行期の漆器模倣タイプ(18)からの系譜では理解できないことから、「関東系B類」と呼ばれ〔品田1991〕、関東でも上野との関連が指摘されている〔鶴巻1992〕。いわゆるC類(21・22)は後半段階まで残るとされる〔鶴巻1992〕。当該期でのT系土師器に関しては、少なくとも前半段階のもの抽出を試みたが、今回はなし得なかった。中世Ⅳ期後半期でのR系土師器の盛行は、中世土師器変遷を二分する越後独自の画期として理解されている〔鶴巻1992〕。当該期での越後の動きは、越中を越え、能登までは確実に影響を及ぼす。

[中世Ⅴ期]

資料は多い。京都系とされるT系土師器が波及する(30・31ほか)。組成は京都系とされるタイプと、R系の「関東系」とされる32・33のタイプに限定される。京都系のタイプは阿賀野川北部地域にも波及し、地域差は出土量でしか現れなくなる〔鶴巻1992〕。

まとめ

北陸での中世土師器は、基本的にはいわゆる土師皿に限られている。煮炊具は加賀で若干みられるものの頻度はきわめて低い。したがって、ここでは土師皿の出土状況、そして用途との係わりを概観しておく。中世土師器の出土状況と、機能に関しては、宇野他〔宇野他1992〕、田嶋〔田嶋1992〕、藤田〔藤田1992〕ほかの検討がある。

中世土師器の出土状況は、時代、地域、そして遺跡の階層的在り方と遺跡の種別により異なる。表1は北陸の中世遺跡で、土器・陶磁器類に定める土師器(皿)の組成比が示されているものを、管見の範囲でとりまとめたものである⁽³⁾。計量方法には口縁部計測によるものと、破片数を集計したものがある。

12世紀の後半から14世紀中頃までは、加賀では、計量データをもつ全ての遺跡で、90パーセントをこえる高率を占める。それに対し能登以東では60パーセントから70パーセント前後に集中、相対的に構成比を減少する。同時に東の地域ほど構成比を減らす。能登以東にみる構成比のバラツキは、遺跡の階層との相関性で理解され、階層の高い遺跡ほどその頻度が高いとされる〔宇野他1992〕。このことは、調査面積当たりの出土量、用途別構成比にみる食膳具の比率からも指摘されている〔宇野他1992〕。加賀の在り方は、一般的村落遺跡の集計資料が少ないことから保留部分をのこすが、階層性と相関する一方で、一般的村落でも一定程度普及していた結果とみたい。

能登以東の地域(北陸北東部)と、加賀地域(北陸南西部)との土器組成と土器消費量の地域差は、古代でも指摘できる〔田嶋1992〕。中世での土師器消費の在り方、とくに一般的村落遺跡間での消費量の格差は、古代の在り方を継承した地域差と理解しておきたい、このことは東日本と西日本の大きな違いとして、指摘されていることでもある。

14世紀後半頃を境に様相が大きく変わる。加賀も含め全体として土師器頻度が大きく減少する。その一方で、越中の例では、90パーセントを超える高い構成比をもつ遺跡が現れる。高率を占める

表1 土師器構成比率

区分	遺跡名	時期	構成比率	備考
加賀	三木だいもん遺跡	12c初～14c中	93%	破片数
	辰口西部E・G地区	13c～14c前	91.4%	破片数
	中屋サワ遺跡	14c	84%以上	破片数 修正値90%以上
	宮保館跡	13c、15c後半	97.2%	破片数
	佐々木アサバタケ遺跡	12c～15c	79.3%	
	白山遺跡	12c～16c	77.5%	
	普正寺遺跡	14c後～15c前	69.9%	破片数
能登	御館遺跡	13c前～中	61.9%	
	縄手遺跡	13c前～中	52.9%	
	桜町遺跡	13c前～中	79.4%	
	御館遺跡	15c後～16c前	69.5%	
	縄手遺跡	15c後～16c前	59.2%	
越中	じょうべのま遺跡C地区	12c後～13c前	53%	口縁部計測
	じょうべのま遺跡K地区	12c後～13c前	57%	口縁部計測
	神田遺跡	12c後～13c前	85%	口縁部計測
	若宮B遺跡	13c前～後	82%	口縁部計測
	江上B遺跡	13c後～14c	37%	口縁部計測
	井口城	15c後	97.9%	口縁部計測
	安田城	16c末	95.8%	破片数
	壇ノ城跡	15c～16c	65.4%	口縁部計測
越後	白鳥城跡	16c	75.7%	口縁部計測
	番場遺跡	15c代	37.3%	破片数
	馬場屋敷下層遺跡	13c後～14c前	69%	個体数
	馬場屋敷(上層)遺跡	15c～16c前	5.9%	個体数
	三貫梨遺跡	12c末～15c前	7.6%	
	宝積寺館遺跡	13c～16c	26.9%	総個体数 423
	牧目館跡	15c～16c前	2%	総個体数 174
堀ノ内館跡	15c後～16c後	31.1%	総個体数 180	

越中の例は城館遺跡である。加賀での城館遺跡のデータ，越中での一般的村落遺跡のデータがなく，遺跡種による出土頻度を対照できる状況にはないが，この動きは，土師器の一般的村落遺跡からの撤退と，特定遺跡での多用という，使用状況の変化を反映したものと理解したい。

このあたりの変化を用途との係わりでみておきたい。14世紀後半以降の土師皿に油煙痕のあるも

表2 白江梯川遺跡にみる土師器と箸

井戸番号	時 期	箸		土師器皿	
		有無	点数	有無	油煙痕
28号井戸	12c～13c	○	1	○	
2号井戸	14c前半	-	-	○	
6号井戸	〃	-	-	○	
15号井戸	〃	-	-	○	
26号井戸	〃	-	-	-	
19号井戸	14c後半	-	-	○	
4号井戸	14c代	○	39	○	
8号井戸	14c後半	○	20	○	
9号井戸	14c後半	-	-	○	油煙痕
7号井戸	?	○	16	-	
12号井戸	?	○	15	-	
16号井戸	15c前半	-	-	○	油煙痕
17号井戸	〃	-	-	○	油煙痕
18号井戸	〃	-	-	○	
20号井戸	〃	-	-	○	
34号井戸	〃	○	11	○	油煙痕
22号井戸	15c後半	-	-	○	油煙痕
5号井戸	15c後半	-	-	○	油煙痕
23号井戸	15c前半	-	-	-	

石川県立埋蔵文化財センター「白江梯川遺跡I」1988

のが目立つことは良く指摘される。表2は石川県小松市白江梯川遺跡の土師器皿出土井戸を時期別に配列し、土師器皿にみる油煙痕有無を示したものである。白江梯川遺跡では70基の井戸が確認されているが、油煙痕有無の記載がある3次調査分15基を対象としたい。出土土師器の点数と油煙痕をもつ個体数の記述がなく、その頻度は明らかでないが、14世紀後半資料で油煙痕をもつものが現れ、15世紀以降は、ほとんどに油煙痕がみられるようになる。

藤田は加賀の資料から、油煙痕がみられるのはAタイプの小型品がほとんどで、大型品であるC・E・Fタイプとは機能の違いを想定、さらに、14世紀後半以降大型品が少なくなるとしている〔藤田1992〕。四柳は能登穴水町西川島遺跡資料から、13世紀前半から中頃は、皿従、小皿主、15世紀後半から16世紀前半は皿主、小皿従であるとしている〔四柳1992〕。両者の指摘は一見矛盾するようにみられるが、藤田の指摘は、加賀での小皿の灯明皿への転換と、皿の一般村落遺跡からの撤退の状況を示し、四柳の指摘は、小皿が灯明皿への転換したことによる小皿の相対的減少と、定量の皿をもつ階層的上位遺跡の状況を反映したものと理解される。

14世紀頃までは、土師器皿使用量の西高東低的在り方を基調に、絶対量の少ない東の地域ほど、遺跡の階層性が使用頻度の違いとして現れる。14世紀後半頃からは、従来の土師皿の使い方は特定遺跡に偏在、特殊化し、同時に土師器皿の一部が灯明皿に機能転換するという変化が予測される。そして、その大きな転換期を14世紀後半頃に考えたい。

以上北陸での中世の土師器の様相を概観したが、筆者の力量不足から編年案を提示するに至らなかった。定見をもたないままではあるが、若干の検討課題を提示しておきたい。

中世土師器変遷では14世紀中頃、中世Ⅲ期とⅣ期の交に大きな変革がみられた。いわゆる中世前半期では、古代後Ⅲ期の評価、中世Ⅱ期の細分、中世Ⅱ期とⅢ期の区分、中世Ⅰ期の様式理解で多分に検討課題をのこした。

古代後Ⅲ期は、土器素材が他の素材に転換する段階であると同時に、土器供膳器の用途による使い分けが形式差として明瞭に現れる、中世土師器の起点として評価した。この期の成立を大きく評価することは、9世紀後半の変化、同時に中世Ⅰ期の評価と係わる。中世Ⅰ期からⅡ期にかけての様式区分では、定見を用意できなかった。それは中世Ⅰ期前半の様相が必ずしも明らかになっていないことによるが、それ以外に、T系土師器の波及状況を把握できていないこと、さらにはT系土師器の形式転換が整理できていないことも要因となっている。検討課題としたい。中世Ⅱ期とⅢ期の交に関しては、少なくとも加賀では大きな変化は見いだせない。中世Ⅲ期前半までは同一様式とせざるを得ない。中世Ⅲ期成立の指標を、中世Ⅱ期にみられた形式の衰退、在地化におくならば、その変化は中世Ⅲ期の後半期の変化といえる。その点で四柳のⅡ期の区分〔四柳1992〕が有効である。ただ、Ⅲ期後半期を単独様式として設定できるどうかは、次の中世Ⅳ期の評価と関わる。

中世後半期に関しては、ほとんど検討できなかった。その中で、Ⅳ期での土師器の変化は、先に触れたような機能面での変化を伴ったものととらえた。また、Ⅴ期後半ないしはⅥ期での、いわゆる京都系土師器皿の波及は、少なくとも現象的にはⅡ期後半での図1-16のタイプの波及ときわめて類似した変化ととらえられよう。土器の変化には、用途・機能の転換を伴った基底的レベルでの変化と、その統合・編成レベルの変化があると考えている〔田嶋1995〕。そして、Ⅳ期での土師器変化は前者に、いわゆる京都系土師器皿の波及を後者に該当させ理解したいと考えている。

吉岡康暢はⅣ期の食器組成に関し「近世的器種組成に連なる動きとして理解できよう」としている〔吉岡1991〕。吉岡の指摘はきわめて慎重な議論であり、ここでの引用は誤解を産む恐れがあるが、筆者は、Ⅳ期の画期は中世を二分する画期であるばかりでなく、古代、そして近世を射程にいられて評価すべき大きな変革を内包した画期と理解している。このことの具体的検討はできなかったが、陶磁器類はもとより、石製品では石臼⁽⁴⁾、木製品では漆器、曲物⁽⁵⁾と結桶⁽⁶⁾、箸状木製品⁽⁷⁾、杓子⁽⁸⁾などをからめる中でより総合的、構造的な把握が可能となろう。

(石川県埋蔵文化財保存協会、国立歴史民俗博物館共同研究員)

註

(1)——小皿が9cm代に縮小、斉一化する動きを、ここでは古代後Ⅲ期に帰属させたが、中世Ⅰ期での変化である可能性を多分にのこしている。中世Ⅰ期での他の器種にみる新たな法量規格の成立と軌を一にした動きと

らえたいが、現状では資料不足。今後の検討課題とした。

(2)——土製鍋は加賀地域にみられる。中世Ⅱ期に波及、Ⅲ期頃までみられると推定しているが、波及時期と終末

期は保留部分を残す。平安京系土師器皿とセットで波及したと想定したい。加賀では面的分布を示すが、以東の北陸での確認例はない。出土頻度は高くないが、加賀の該当期の遺跡では例外なく出土するとみている。

(3)——表作成にあたっては、主として〔北陸中世土器研究会1991〕と〔北陸中世土器研究会1992〕によった。原典にあたる作業はできていない。また、出典についてもここでは省略した。ご容赦願いたい。

(4)——15世紀前半代での確実な例はない。普及は15世紀後半代である。

(5)——古代で通有にみられた、「筥」として用いたと推定される法量の曲物は、中世には欠落する。中世の曲物は、少なくとも狭義食器としては客体となる。〔川畑誠1994〕

(6)——結桶は、加賀市永町ガマノマカリ遺跡、小松市白江梯川遺跡、金沢市戸水C遺跡、珠洲市飯田町遺跡例などがある。金沢市戸水C遺跡F区1号井戸は鎌倉末期、白江梯川遺跡第3次調査1号井戸は15世紀前半頃とされているが、共に共伴資料の年代観に検討の余地をのこす。現状では15世紀後半代の珠洲甕（VI期）と共伴した飯田町遺跡1号井戸例が確実視できる最古例といえる。

(7)——箸状木製品は8世紀以降確認できるが、古代では出土遺跡に偏りをもつ。北陸では中世Ⅱ期頃より、一般的な村落遺跡でもみられるようになる。出土状況は井戸、溝より多量の土師器皿とともに一括出土するものが目立つ。出土量は多い。中世Ⅳ期頃より、一般的な村落での出土が急減し、再び出土遺跡に偏りが現れる（表1）。この変化に関しては、従前の井戸等に廃棄するという、廃棄パターンの変化としての説明もみられるが、土師皿大量廃棄例の一般的な村落から撤退と連動した動きと考えたい。

箸状木製品については、普通の食事具であるのか、それとも特殊な場で用いられた食事具であるのかの議論がのこっている。普通の食事具とらえた場合は、一般化、普及は中世Ⅱ期頃となり、あまりに遅いように思われる。

(8)——杓子は5世紀頃より急減し、古代での出土は希である。少なくとも北陸での確認例はない。中世には、出土頻度は近世ほど高くないが再び確認できるようになる。杓子が律令期を中心に激減することは、全国レベルでも確認された（第39回埋蔵文化財研究集会 1996年3月2日～3日開催）。律令期での激減傾向を合理的に説明できないが、中世に再びみられるようになる形式として注目しておきたい。

引用・参考文献

- 伊藤隆三 1990 『北反敵遺跡 条里遺構の発掘調査概要Ⅱ』小矢部市教育委員会
 宇野隆夫 1986 『越中弓庄城跡の土師器—中世の北陸と畿内—』『大境』第10号
 宇野隆夫・宮田進一他 1992 『越中』『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
 春日真実 1993 『佐渡の中世土器・陶磁器』『中世北陸の家・屋敷・暮らしぶり』北陸中世土器研究会
 川畑 誠 1994 『石川県内出土の木製食器・容器に関する覚書』『北陸古代土器研究』第4号 北陸古代土器研究会
 坂井秀弥 1988 『新潟県における中世考古学の現状と課題』『新潟考古学談話会会報』第1号
 坂井秀弥 1991 『シンポジウム』『土器からみた中世社会の成立』の成果と今後の課題』『新潟考古学談話会会報』第7号
 品田高志 1991 『越後の中世土師器—編年的研究の現状と課題』『新潟考古学談話会会報』第8号
 田嶋明人 1986 『考察 漆町遺跡出土土器の編年的考察』『漆町遺跡』Ⅰ 石川県立埋蔵文化財センター
 田嶋明人 1988 『古代土器編年軸の設定』『シンポジウム 北陸の古代土器研究の現状と課題』石川考古学研究会
 北陸古代土器研究会
 田嶋明人 1992 『(雑感) 古代の土器と中世の土師器』『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
 田嶋明人 1995 『土器と古墳時代』『北陸古代土器研究』第5号 北陸古代土器研究会
 田嶋正和 1988 『加賀における中世土器の様相』『北陸の中世土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
 鶴巻康志 1992 『越後における中世土師器の動向』『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
 藤田邦雄 1989 『中世土師器素描』『北陸の考古学Ⅱ』石川考古学研究会
 藤田邦雄 1992 『加賀における様相—土師器—』『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
 北陸中世土器研究会 1991 『城館遺跡出土の土器・陶磁器』
 北陸中世土器研究会 1992 『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』
 増山 仁 1992 『金沢城下出土の土師器（予報）』『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
 宮田進一 1990 『北陸』『中近世土器の基礎的研究Ⅳ』日本中世土器研究会
 宮田進一 1992 『越中における中世土師器の編年』『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』北陸中世土器研究会
 望月精司 1993 『銭畑遺跡』Ⅱ 小松市教育委員会・有限会社 叶井
 吉岡康暢 1994 『中世的食器組成の特質と時期区分』『中世須恵器の研究』吉川弘文館

-
- 四柳嘉章 1987 「1 中世土師器の編年について」『西川島』穴水町教育委員会
四柳嘉章 1992 「能登における中世土師器の編年について（補遺）」『中世前期の遺跡と土器・陶磁器・漆器』
北陸中世土器研究会